

## 92 誌上発表

## 『外科啓玄』の鍼灸

上田 善信

上田鍼灸治療院

## 緒言

『外科啓玄』12巻(1604)は明の申拱宸(生没年未詳)が撰じた外科書である。拱宸は長州(今の江蘇蘇州)の人で、本書の弟・申五常の後序によると、字は子極、斗垣と号した。若い頃、建康に游侠し、異人に秘法を授けられ、後に医術を学び、外科に精通して度々奇効を収めた。本書以外の著書に『傷寒舌弁』2巻(1604)が伝存する。『医籍考』に『傷寒観舌心法』1巻を著録するが、これは『傷寒舌弁』の異名同書と見なされている。本書の巻一～巻三は瘡瘍の病因・診断・治療原則、巻四～巻九は瘡瘍の部位・経絡・治法、巻十は痘疹、巻十一～巻十二は方剤から成り、『千金方』『外科精要』や「丹溪云」「東垣云」等の引用が見られる。書名の由来については、自序に「余雖才智疏匪、発瘡瘡瘍、乃先賢未発之秘、啓前人不尽之玄、故名云外科啓玄」とある。

明代の外科書の例に違わず、本書においても外科への鍼灸の利用が見られる。本書の鍼灸条文は全62条で、その内分けは鍼法条文33条、灸法条文23条、鍼灸併用条文3条、鍼灸の呼称のみ見える条文3条である。以下、本書の鍼灸について検討する。

## 鍼法条文の内容

巻三・明瘡瘍宜砭鎌論に「砭石鍼刀鎌、乃決瘡毒之器械也。所謂瘡毒之宜出血、可急去之意、不可延緩、恐毒勢變走」とあるように、本書における施鍼の目的は鍼刀、利刀、鉞鍼などを用いて切開し、悪血、膿血を取り除く外科的用法にある。ただ外科的処置のためには診断が重要で、巻二の首篇である明瘡瘍有無膿論では「知瘡之生熟、形之緩急、膿之浅深多少、当視其可鍼未可鍼否、不致于危殆矣」と述べている。このほか、特殊な鍼法として、松鍼、蜚鍼(治法は有るが名称は無い)火鍼の用法が論じられている。また巻七・喉閉乳蛾及び巻十二・癘風部・治喉神鍼方には喉鍼の名が見えるが、具体的な鍼の形状及び施鍼法の記述は無い。管見によれば、喉鍼の初出は『明医指掌』巻八・雜科・喉痺・咽喉熱證の「喉痺乳蛾、諸證在関上者、必有血泡、用喉鍼点破即寛」で、これを引いたものであろう。

## 灸法条文の内容

施灸の効用については、巻四・総論で「癰癤初則宜灸、謂其氣本浮、令其氣血通達暢快矣」と述べ、瘡瘍の状態による施灸の適不適については、巻三・明瘡瘍宜灸論で「灸瘡之法不一、故以鳴之、如瘡外之内者、則不宜灸、宜托裡。内之外者、宜灸」とし、これに続けて「有隔蒜片灸者、有附子片灸、或香豉餅香附餅及生薑片等灸法、即使毒氣宜発而散」と言う。ただ具体的な施灸法の記載があるのは隔蒜灸及び灸癰癤法・癰癤取穴灸法だけである。薛己や汪機の外科書に比較して本書では隔物灸が極端に少なく、騎竹馬灸法や明代創始の灸法である雷火鍼や神灯照法も見られない。施灸の壮数は、3壮、7壮、年壯等も見られるが、従来外科書と同様に「如痛灸至不痛、不痛灸至痛」を大凡の目安としている。

## 結語

巻四・総論では「古之未竭其奥、未盡其伝。余雖不敏、詳之至微其理、大至癰疽、小至於瘰癧、無不選其精秘、然方法無不挾其良驗…後学者可一覽而即為上志矣」と述べているものの、診断から治療に到る論は薛己や汪機の外科書より簡略で、理解には一定の知識を前提とする。したがって本書は、初学者向けの啓蒙書ではない。なお巻三の明賽火鍼藥法論で述べられている、火鍼を畏れる者に対する患部への薬剤射入法は、斗垣の考案した治法であり、巻十一の吸膿法及び煮竹筒法では、施術に用いる器具の消毒法を一步進めている。以上の二点は十分に評価すべきであろう。